

# 「うれしい信仰」

牧師 森 言一郎

主の家に行こう、と人々が言っ  
たとき 私はうれしかった

(詩編122篇1節)

## 1. 「詩編122篇」との新しい出会い

旭東教会の「賛美と聖書とお祈りの会」(祈祷会)で詩編を学び始めたのは2015年でした。全部で150篇ある詩編ですが、この緑の牧場52号が発行される頃にはようやく150篇全部の学びが終わりそうです。そんな中で、詩編122篇はとりわけ心に残る学びの機会となりました。詩編を学び始めて努力して心がけてきたことは、様々な翻訳を参加者と共に味わうということでした。『リビングバイブル』(日常語訳で大胆

な意訳が特徴)も『現代訳』(読むだけでよく分かる聖書と帯にある)も読み大いに刺激を受けて理解が深まりました。122篇を皆さんと一緒に読んだ時に心から感動した翻訳は、勝村弘也先生(神戸松蔭女子学院大学名誉教授)の、「イェルサレム、それは(仲間が)互いに結ばれる町として建てられている。」というみ言葉でした。ちなみに、勝村弘也先生は牧師ではありません。

勝村先生のこの訳は、エルサレムが建物や構築物が連なる場所としてではなく、何より礼拝の場所として、人と人との出会いが生まれ、連なりが生まれるということの大切さを端的に示してくれるものです。この訳に出会えて本当によかったと思いました。そういう意味では、月本昭男先生や牧野信成先生が全く同じ訳をされた、「エルサレムは立てられた、一つに結ばれる町として」という翻訳も、負けず劣らず素晴

らしいものです。さらに、TEVという英語の聖書の翻訳も、「エルサレムは美しい秩序と調和の中にある」という意味を英語で示してくれて、示唆深いものです。

## 2. 「うれしい」というみ言葉を旧約聖書で他に探してみると

ところで、ここでは、説教でも祈祷会の際に全くふれなかったことを、新たに調べてみてご紹介してみようと思います。詩編122篇冒頭の1節に注目してみましょう。「主の家に行こう、と人々が言ったとき 私はうれしかった」とあります。「うれしい」という言葉。聖書の中では、意外なほど用いられていない言葉なのです。日本語としての「うれし（い）」という言葉がどこで用いられているかをパソコンを使って調べてみることにしました。使ったのは聖書ソフトの「Jバイブル2017」です。

すると、私たちが普段使っている『聖書 新共同訳』に限定すると、旧約聖書の中で「うれし（い）」という語が使われているのは、唯一、この詩編122篇1節だけであることがわかりました。念のため、『新改訳2017』という聖書でも調べてみたところ、預言書のひとつゼカリヤ書8章19節に「うれしい」が出てきますが、ここではこれ以上ふれません。

### 3. 新約聖書の「うれしい」はどこに使われているか

次に、新約聖書ではどうなのでしょう。新共同訳で「うれし（い）」が出てくるのは4つの箇所だということがわかりました。ここでは、『ヨハネの手紙 二』の1章4節と、同じ『ヨハネの手紙3』の1章4節は省略します。使徒パウロが記した手紙の中の二つのみ言葉にしぼって紹介

しましょう。いずれもパウロが記した有力な手紙として知られるものです。

一つ目は、第一コリント書です。16章17節に、「ステファナ、フォルトナト、アカイコが来てくれたので、大変うれしく思っています。この人たちは、あなたがたのいないときに、代わりに務めてくれました」とあります。

二つ目は、第一テサロニケ書の3章6節です。「ところで、テモテがそちらから私たちのもとに今帰って来て、あなたがたの信仰と愛について、うれしい知らせを伝えてくれました。また、あなたがたがいつも好意をもって私たちを覚えていてくれること……を知らせてくれました」とあります。

4. パウロが使った「うれしい」に共通していること

第一コリント書と第一テサロニケ書に共通していることがあります。それは、不思議なことに、詩編122篇1節にも共通することなのです。端的に申し上げるならば、信仰生活の「うれしい」は、主イエス・キリストにある、人と人との「交わり・出会い」の中にあるということです。

コリント書の「うれしい」には「ステファナ、フォルトナト、アカイコ」という三人の人たちが関係しています。彼らはコリントという当時の国際的な商業都市の教会に、信仰に生きるもたちの主にある交わりの大切さを運んで来てくれたとパウロは言うのです。

特に、「ステファナ」についてパウロは少し前の15節で、「ステファナの一家は、アカイア州の初穂で、聖なる者たちに対して労を惜しまず世話をしてくれました」と記すのです。信仰生活

の喜びがどこに隠されているのか。大切なヒントが示されているように思えてなりません。

テサロニケの教会への手紙では、「テモテがそちらから私たちのもとに今帰って来て、あなたがたの信仰と愛について、うれしい知らせを伝えてくれました。」とパウロは言います。テモテはパウロが大変信頼していた弟子です。テサロニケの教会の中に育まれている、「信仰と愛」にテモテを通じてパウロがふれたとき、それは何よりもの元気の素<sup>もと</sup>になり、慰めを受けたというわけです。今も昔も変わらない信仰に生きる人々の力の源がここに 있습니다。

5. おわりに 私たちも「うれしい」を祈り求め、生きて行こう

最後に私たちに示されていることを思い巡らしてみましよう。それは、「交わり」というキリ

スト教会独自の言葉に表されるものです。それは共に生きる者たちの絆であり、力であり、喜びです。「うれしかったね」を私たちは素朴に大事にし、分かち合っていきたいと願うのです。

詩編122篇1節から、「さあ、一緒にエルサレムに行こう」という交わりがあったことを私たちは知ります。詩編詩人とその詩人が生きる共同体は、そのことを「私にはうれしかった」と、ごくごく平凡で日常の言葉で告白しているのです。私たちの「エルサレム」は日曜日毎の「礼拝」であり「教会」であるはずです。

現代の文明の利器であるメールは便利ですが、昔ながらの手紙やハガキには不思議な力があることを思います。私もお便りを頂くと、しばしば余韻を味わいます。自然としばらく自分の手元に置きたくなることがしばしばです。



パウロの時代はどのようにして手紙が届けられていたのでしょうか。飛脚をなりわいとする人がいたのでしょうか。「うれしい言葉」を生み出す人・編み出す人となるために、私たちは少しばかりの勇気を出し、努力もしたいものです。そのためには、何かを手放して、何かを選び取る生き方の選択を求められているのかも知れません。皆さん、いかが思われますか。end